



博士人材育成コンソーシアムシンポジウム2022

博士人材のためのキャリアパスシンポジウム

～文理融合を含めた文系博士の育成とその活躍の場～

開催報告

2022年11月15日（火）新潟大学 大学院教育支援機構 PhDリクルート室

開催日：2022年10月28日（金）13:30~17:00

開催場所：有壬記念館

参加者：121名（対面：43名、オンライン：78名）

コンソーシアム連携大学*1 34名

新潟大学 53名

その他大学*2 18名

産業界 9名

講演者 7名

*1 北海道大学、東北大学、名古屋大学、筑波大学、お茶の水女子大学、横浜国立大学、立命館大学、

大阪大学、神戸大学、兵庫県立大学、沖縄科学技術大学院大学

*2 令和4年度11月以降に加盟予定の東京外国語大学の参加者数を含む。



文理融合を含めた
文系博士の育成とその活躍の場

博士人材育成コンソーシアム シンポジウム2022

博士人材のためのキャリアパスシンポジウム

日時 2022.10.28 Fri / 13:30-17:00

場所 対面 / 有壬記念館 〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757
オンライン / ZOOM

プログラム

- 13:00 受付開始
- 13:30 開会挨拶 牛木 辰男 新潟大学 学長
- 13:35 来賓挨拶 岡 貴子 文部科学省 科学技術・学術政策局 人材政策課 人材政策推進室長
- 13:55 基調講演 辻村 達哉 共同通信社編集委員室 編集委員兼論説委員
- 14:45 事業報告 吉原 拓也 北海道大学 大学院教育推進機構 先端人材育成センター長
- 15:00 休憩 ~15:15
- 15:15 パネルディスカッション 「文理融合を含めた文系博士の育成とその活躍の場」
パネリスト 各10分ずつセッション後、ディスカッション
● 佐野 栄俊 岐阜大学 工学部助教(元コンソーシアム育成助成(名古屋大学):博士(理学))
● 星 かおり 日本航空株式会社 運航本部地上教官(元お茶の水女子大学特任講師:博士(社会科学))
● 岡田 清司 東京富士大学 教授(博士(法学))
● 佐藤典樹代 株式会社トクヤマ ヘルシクア材料グループ グループリーダー(博士(工学)中途)
● 村山 敏夫 新潟大学 教育学部准教授(博士(工学))
モデレーター ● 樋口 直樹 新潟大学 大学院教育支援機構 PhDリクルート室特任教授
- 17:00 閉会挨拶 本田 明治 新潟大学 副学長

申込 以下のフォームよりお申込みください。
URL: <https://forms.gle/z8R2ohfCVvpC2E9>
10/21(金)まで

お問合わせ 新潟大学大学院教育支援機構PhDリクルート室
Mail: phdrecruit@gs.niigata-u.ac.jp
Tel: 025-262-7217

連携大学 北海道大学 東北大学 名古屋大学 新潟大学 筑波大学 お茶の水女子大学 横浜国立大学 YNU 大阪大学 KOBEL 国研 OIST

博士人材育成コンソーシアム
Consortium for Career Development of Ph.D.

本事業は、北海道大学が代表機関として東北大学、名古屋大学とともに文部科学省「科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業(次世代研究者育成プログラム)」に申請、採択され、平成26年度スタートした事業です。本事業は、北海道大学、東北大学、名古屋大学の3大学が「コンソーシアム」を形成し互いの研究人材育成資源を結集して、多様な分野を対象とした次世代研究人材育成システムを構築するもので、本コンソーシアムは連携を拡大しており、現在は追加の3大学に加えて新潟大学、筑波大学、お茶の水女子大学、横浜国立大学、立命館大学、大阪大学、神戸大学、兵庫県立大学、沖縄科学技術大学院大学で活動しております。

参加者の内訳

所属	参加方法	教職員	学生	一般	不明	小計	合計
新潟大学	対面	18	4		0	22	53
	オンライン	18	12		1	31	
コンソーシアム連携大学	対面	11	0		0	11	34
	オンライン	15	7		1	23	
その他大学 ※東京外国語大学含む	対面	3	0		0	3	18
	オンライン	12	3		0	15	
産業界	対面			0	0	0	9
	オンライン			6	3	9	
講演者	対面	4		3	0	7	7
小計		81	26	9	5	121	

対面参加者 43
 オンライン参加者 78
 121 (人)

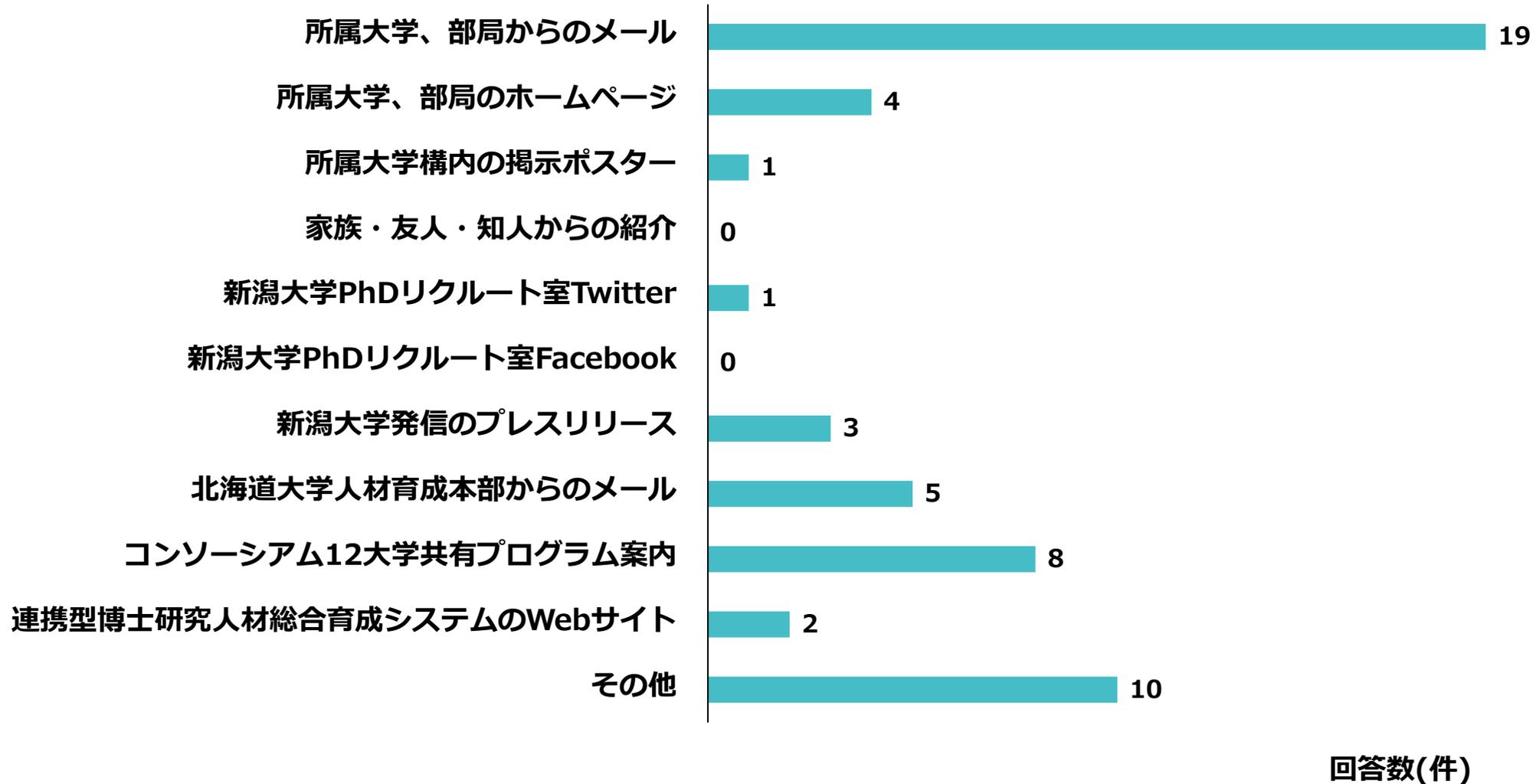
【アンケート結果】

回答者45名、回答率37.2%

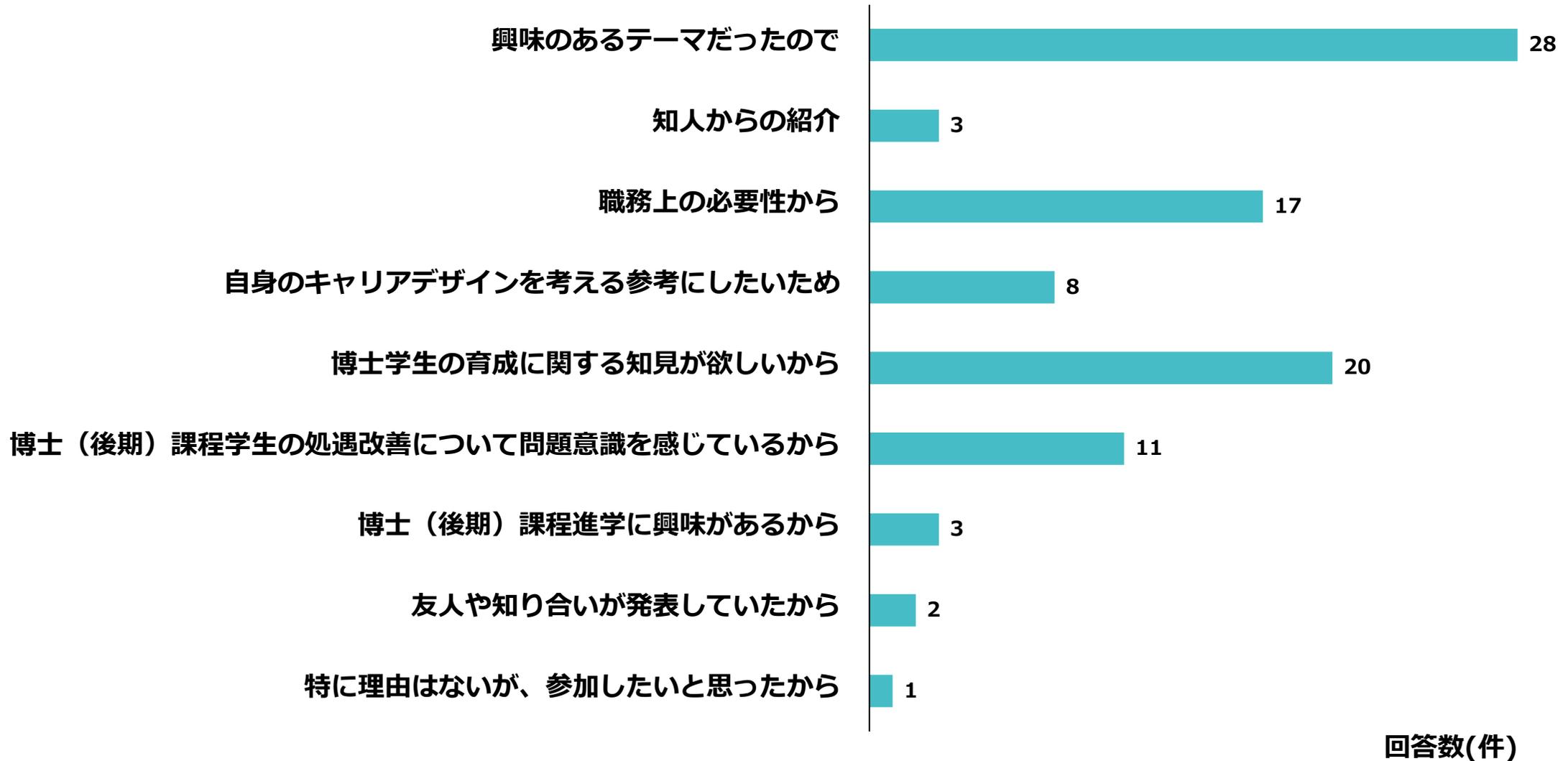
■ 質問項目

- (1) シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答可）
 - (2) シンポジウムの参加理由（複数回答可）
 - (3) 基調講演の評価
 - (3)-1 基調講演の主な感想
 - (4) 事業報告の評価
 - (4)-1 事業報告の主な感想
 - (5) パネルディスカッションの評価
 - (5)-1 パネルディスカッションの主な感想
 - (6) コンソーシアム（全12大学）の取組みについてのご意見
 - (7) 博士人材に関して、課題だと思っていること（一部抜粋）
 - (8) シンポジウム全体を通してのご意見・ご感想（一部抜粋）
-

(1) シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答可）



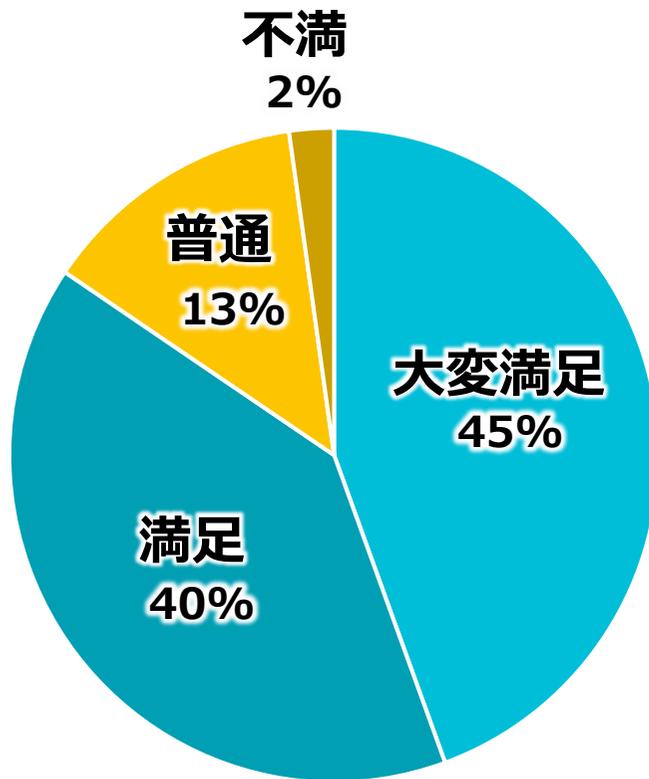
(2) シンポジウムの参加理由（複数回答可）



(3) 基調講演の評価

テーマ：**Change !**

演者：**辻村 達哉**（共同通信社編集委員室 編集委員兼論説委員）



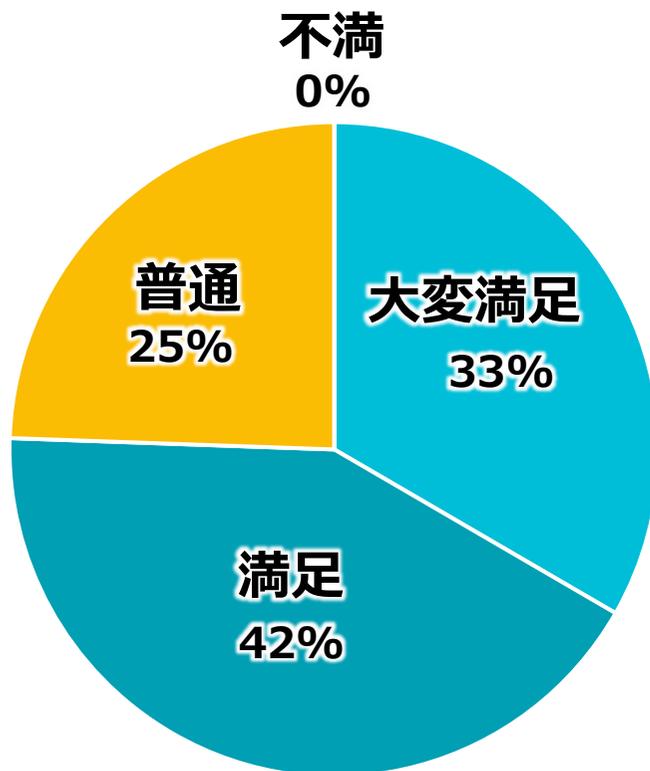
(3)-1 基調講演の主な感想

理系博士のインターンシップ成功例や、文系博士の問題である出版を解決するために起業した方の話など、どれも興味深い実例で大変勉強になった。
人文社会系DC等大学一産業界以外からの見え方がわかって非常によかった。
新聞社の論説委員という立場から、客観的な分析と今後に向けた課題を確認することができた。
記者という立場から大学・博士生を見るという、普段の業務上では知り得ない視点での知見を得られた。
博士課程の院生を取り巻く様々な問題について、初めて聞く事ばかりであった。改めて研究活動を行うモチベーションが高まった。
多角的に (実際のインタビューや新聞の切り抜きなどを用いて) お話して下さり、大変参考になった。自身の専門分野の一つである整数論を専攻していた方のインタビューが興味深かった。(まさか、整数論の人が出てくるとは、、、!)
日本の博士、特に文系博士の厳しい現状がよくわかった。蛇足ながら、当社では「博士」は名刺に記載している。
実際の博士学生のその後の社会との関わり方が様々であること、また現在の課題を通し、博士課程学生支援の在り方について考えることができた。特に海外との比較についてお話を伺い、以前からフランスにいる友人より日本とは比べものにならない子育て支援の様子を聞いていたが、一時的な出産育児支援に留まらない社会全体の人材育成に対する意識が日本とは根本的に違うものであると感じ大変勉強になった。

(4) 事業報告の評価

テーマ：博士人材育成コンソーシアムシンポジウム2022事業報告

演者：吉原 拓也（北海道大学 大学院教育推進機構 先端人材育成センター長）



(4)-1 事業報告の主な感想

他大学の中でどのような取り組みが行われており、それがどのように繋がっているのかを知ることができた。

博士に関する情報がなぜネガティブなのかという切り口がとても面白かった。

博士人材の採用時期が早まっているなど問題意識が伺えた。

博士人材コンソーシアムの意義を理解できた。

前半の概説、後半の事業報告とも非常に分かりやすかった。
これまでの取り組みにより、当初予定をはるかに上回る学生が恩恵を受けられたことも知ることが出来た。

事業の到達点と今後に向けた方向性を確認することができた。

目標数値を大きく達成しており、担当者の努力が垣間見られた。

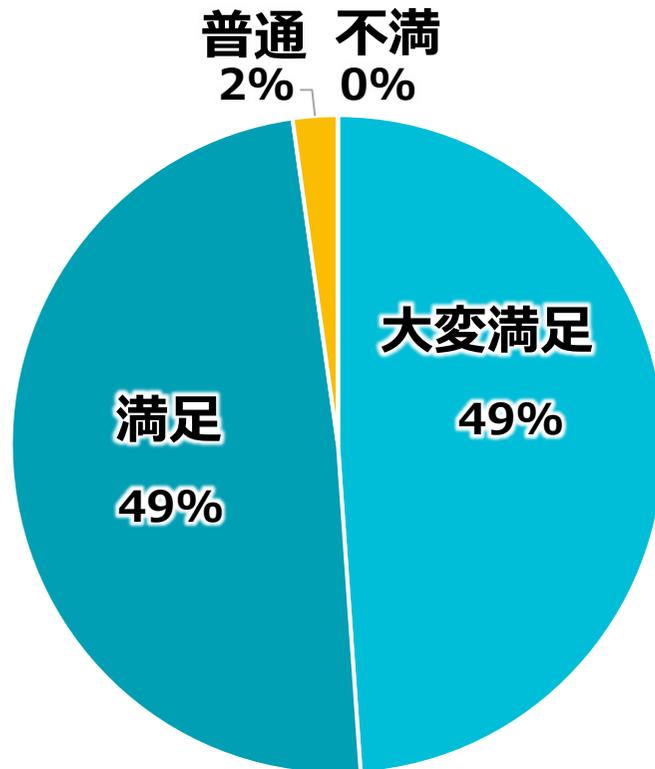
現状と2022年～の課題としている点を明確に話して頂いた。

(5) パネルディスカッションの評価

テーマ：**文理融合を含めた文系博士の育成とその活躍の場**

パネリスト：**佐野栄俊**（岐阜大学） **星かおり**（日本航空株式会社） **隅田浩司**（東京富士大学）
佐藤美樹代（株式会社トクヤマ） **村山敏夫**（新潟大学）

モデレータ：**樋口直樹**（新潟大学）



(5)-1 パネルディスカッションの主な感想

パネリストの皆さんが、ご自身が考えていることを忌憚なくお話ししてくださったので、表面的でなく深いディスカッションになったように思う。特に、文系の学位取得や、研究についても大変参考になった。

様々な立場のパネリストがいることで多角的な意見が聞けて非常におもしろかった。

文系博士の進路に関する課題や、自分が何を進路におけるアピールポイントにすべきかを考えるきっかけとなった。

アカデミアへ進んだ方、企業に進んだ方両方の意見が伺えた。（なかなかない機会かと。）

文理融合の具体的なお話しから日本における文系博士の現状と課題がわかりやすく共有され、今後のことについても建設的に議論されていた。

文系博士の課題について融合的分野や新たな研究分野の創出がキャリアにつながる点、興味深うかがった。最後に3年で学位が取れない場合が多い問題も話題となり、整理されたと感じた。

博士に詳しいトップ1%の皆様が集まっても文系博士のメタスキルについてどうやって可視化するばいいかという議論がなされるとは、本当に難しい課題なのだと実感した。

皆さんそれぞれ全く違うお話だけけれど、人材育成や未来の博士人材のことへの思いは同じ。いろいろお話が聞けたのが良かった。

(6) コンソーシアム (全12大学) の取組みについてのご意見

ぜひ今後も継続して、博士人材育成に力を入れていただきたい。並行して、若手研究者育成についても、以前のコンソーシアムのように注力いただけると良いと思った。

予算がついていないのに、よくこれだけの活動ができているな・・・と身内ながら思う。

コンソーシアム外に向けたシンポや問題提起に期待している。

大学間で博士への支援を共有し、とても有意義な取り組みだと思う。

今後もこのようなシンポジウムの試みを続けていただき、取り組みを拡大してください。

仮にコンソに加盟したいとなった場合に、コンソに加盟するためにどのような手続きが必要なのか。(HPから)
→[P18.に回答を掲載](#)

(7) 博士人材に関して、課題だと思っていること（一部抜粋）

<p>文系博士の意識改革（アカデミア以外にも多様なキャリアパスが存在し、選択できることを知ってほしい）、博士を採用する企業の意識改革。</p>
<p>現在の状況を鑑みると大手企業などはよくその価値を理解しているが、大部分の中小企業にその価値を理解してもらえていないこと。</p>
<p>多くの博士課程進学者が進学当初はアカデミアのポストを望んでいるにも関わらず、余裕をもってそのキャリアに挑戦できる環境が不足していると思う。ポスドクを数年続け高度で専門的な知識経験を持つ研究者が、ライフステージの変化に対応できる収入を求めて作業性の高い職種に転向せざるを得ない現状があり、これは非常に社会的損失が大きいことだ。</p>
<p>日本企業の留学生に対する日本語レベルの要求水準。</p>
<p>博士人材への経済的および教育的サポートを充実させることが必須と考える。具体的には、博士学生ひとりあたりの教員数を増やすことと、奨学金やフェローシップを充実させることが急務である。</p>
<p>(1)時間的・経済的なプレッシャーから、広い意味でのキャリアを意識する余裕が足りておらず、自分の周囲に見える世界のキャリア（≒大学教員や研究員とコンビニや飲食店等の店員）以外がおぼろげになっている。 (2)上記(1)の結果として博士であること自体（ステータス）に見返りを求めてしまい、そのステータスが意味を持つ理由（経験やコンピテンシー）を認識しにくくなっている。</p>
<p>当社に限らないかもしれませんが、新卒の場合、文系の修士・博士を処遇する制度が無く、学士扱いになる。背景には、そもそも人数が少ないことに加え、文系博士のコアスキル問題が大きくかかわっている。</p>
<p>博士人材のキャリアの問題が、学生自身の能力開発の問題として扱われすぎるようにもおもう。学生自身の意識改革や能力強化の必要性は言うまでもないが、教員の意識改革や大学での雰囲気づくりなど、環境面の課題も大きな問題であるとおもう。そういう環境的問題は一大学で取り組むことは難しいので、コンソーシアムでの取り組みに期待したい。</p>

(8) シンポジウム全体を通してのご意見・ご感想 (一部抜粋)

全体を通して、基調講演が何より印象深かった。また、人文の方の研究周辺の話題を聞く勉強になった。
文系博士のキャリアについて、まだ課題は大きいと感じますが国・大学・教員が情報を共有し協力して進めていく契機となる機会をいただいたと感じている。
パネルディスカッションの時間が十分にあり、パネラーの先生方と会場とのやり取りが十分にできたことは、大変よかった。
博士キャリア一般をテーマとするものは少しずつではあるが増えてきているが、文系博士を主題に置いたものは珍しく、また文系理系の不毛な区分を超えていく話であったため、満足している。
博士課程の学生さんに講義をさせていただき上で、大変有意義な情報が詰まったシンポジウムだった。
文系の博士を重視して、いろいろな声を聞かせてよかった。
表面的な内容ではなく、講演者の皆さんが課題に感じていることや、実体験に基づく話をしてくださっているため、大変充実した内容で勉強になることばかりだった。新潟大学の牛木学長をはじめ、大勢の理事・副学長の先生方が参加されておられ、執行部全体が博士人材育成に力を入れていることに感銘を受けた。
メタスキルの言語化、という提言が最も印象に残っています。具体的に言語化していく取り組みをコンソーシアムでもできないでしょうか。 →P18.に回答を掲載

【質問への回答】 辻村 氏

Q. <博士号取得者のキャリアパスにおける年齢の問題について>

文系は博士論文を書くのに時間がかかり、博士後期課程3年で書かない（書けない）ケースも多く、30歳を超えて博士号を取るケースもある。

博士人材にとって、「新卒一括採用」という慣例のある日本において、アカデミア以外に選択肢を増やそうとしても年齢が壁になり、次のキャリアパスへの入り口にすら立てない……という印象がある。これは、日本の社会制度と大学の制度の間のギャップに起因する問題だと思うのですが、このあたりのギャップを乗り越える方法など、何か示唆などを頂けないか。

A. 文系博士の活躍の場をつくるということは日本社会を良い方向に変えるということですので、大学はもちろんあらゆるセクターでの取り組みが求められていると思います。

まず大学は博士号取得者のキャリアを追跡調査して、どのようなスキルの習得が求められているかを調べ、博士課程のプログラムを多様化し、就職先を開拓していく必要があると思います。講演の中で、パブリックヘルスを守る人を育てる公衆衛生大学院をつくれという話をしましたが、日本に欠けていてどうしても必要な知的キャリアがあるのだということをいろいろ考えて、社会に売り込むこともすべきです。また、国にお金がない時代ですので、例えばドイツの大学のように、給料は多少安くても研究職として安心して生きていけるようなポジションを大学内に増やすということをするべきかもしれません。

企業や団体を変えるのはなかなか難しいですが、人手が足りない時代ですので、年齢のハードルは下がりがつつあるのではないのでしょうか。現状では博士のパワーを生かす余地がないと思われる職場であっても、中に入ってみれば力を発揮できることが見つかるかもしれません。

【質問への回答】 辻村 氏

A. (つづき)

外資系企業や国際機関、国際NPOなどは博士号取得者への偏見がないので、日本の企業や団体よりもチャンスはあるように思います。そこから日本の組織に戻ってくるという道もあります。

博士号を取得したということは、世界のどこでも通用する一種のパスポートを得たということだと思います。自信をもって新たな道を切り開き、進まれるよう祈っています。

Q. 社会的な受け皿、出口について、日本の学部生の就職率が95%のところ、院生の就職率は70%程。海外に比べてこの辺の数字は現状どうなのかと、今後どうなるのかをお聞きしたい。

A. 米国科学財団（NSF）の調査では同じくらいの数字となっています。数学・計算機科学と心理学・社会科学はその中でも少し良いようです。Survey of Earned Doctorates という報告書を検索してみてください。

欧州科学財団（ESF）の調査は少数の大学に限っていて、回答者にも偏りがあるようなので実態がよく分かりません。その調査では95%が就職しているとのことでした。分野別では人文系が社会科学系を含むその他の分野に比べ、やや就職率が低くなっています。

今後については予測が付きませんが、増えてほしいと思います。ただ、日本の組織が、博士号取得者だからそれに応じて厚遇するという状況になるまでは時間がかかるだろうなと思います。

【質問への回答】 吉原 氏

■ コンソーシアムに関すること

Q. メタスキルの言語化、という提言が最も印象に残っている。具体的に言語化していく取り組みをコンソーシアムでもできないか？

A. 難しい課題であり、時間がかかると考えられますが、取り組んでゆきたいと思います。

Q. 仮にコンソに加盟したいとなった場合に、コンソに加盟するためにどのような手続きが必要なのか？

A. 下記にご連絡ください。

北海道大学 大学院教育推進機構 先端人材育成センター 連携型博士研究人材育成推進部門COFRe
cofre@synfoster.hokudai.ac.jp